

映画を信じられなくなった人たちへ

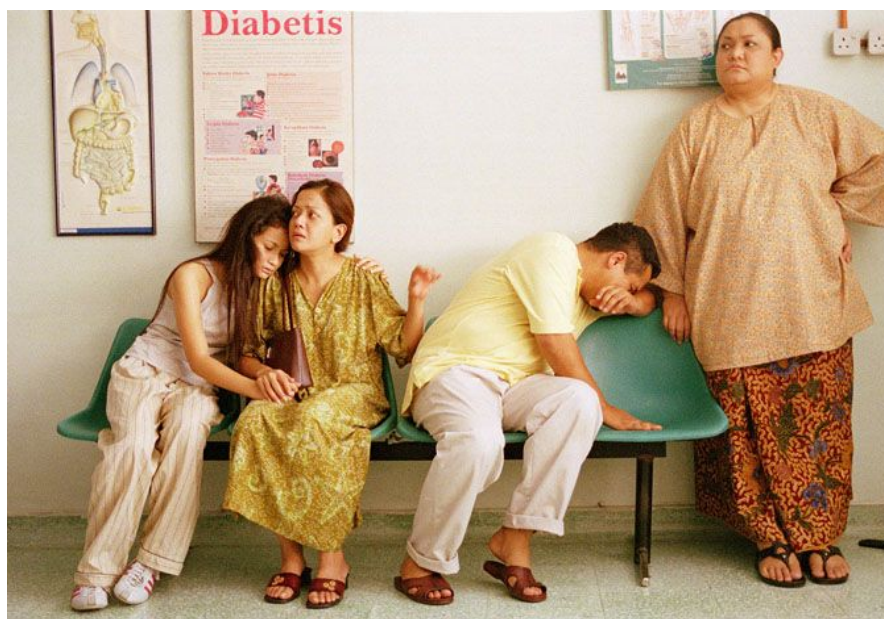
—— ヤスミン・アフマド監督が照らす光 ——

野澤 喜美子

1. 「世界は分裂した」

「日本語なのに伝わらない」。映画配給会社で働いていたとき、自分がどんなに心揺さぶられた映画であっても、相手にその対象への興味がなければ、まったくと言っていいほどコミュニケーションがとれないのだと思い知った。もちろん、自分の能力と広告・宣伝の予算の問題もある。しかし、好きな映画になればなる

ほど、些細なところにこだわって、多くの人に伝わる言葉で語れなくなるという危険にも気づいた。同時に、ひとくちに“映画が好き”といっても、アート系、ハリウッド系、テレビドラマの続編に、アニメ、ホラー、ドキュメンタリー……など、その好みは多岐にわたり、まるでそれぞれが、狭くて深い穴を掘り続けているかのように交らず、共有できる思いや言葉もほとんどないというのが、ここ



▲ 『グブラ』(2006)

数年の実感だ。

台湾のツァイ・ミンリャン監督は「芸術映画と商業映画の間には、もはやはっきりと線引きがされて、映画の世界は分裂した。世界的にみても、アートフィルムをかけるスクリーンは減少し続けて、私のような芸術映画を作る人たちが生きる道がどんどん狭くなっている」と危惧していた。

実際、ツァイ監督作品の配給に携わったが、日本での興行成績は芳しくなかった。有名な俳優も出ていない、華やかなアクションもない、目を見張るようなCGもない、という今どきのメインストリームに乗らない映画、地味な映画、それでも、その作品でしか刺激されない感性に気づかせてくれる映画。今や閉ざされた世界で、クラシック映画がひんぱんにかかるアテネ・フランセや日仏学院、フィルムセンターに日参している人々が、この種の映画をкаろうじて支えているのが現状だ。そうした映画は、ビジネスの



▲ 『細い目』(2004)

世界からは完全に切り離されてしまったのだろうか。マイナーでも優れた作品を生みだしている映画監督たちの、生存を支える手段はあるのだろうか。

2. 開いている魅力

このような葛藤を抱えるなか、2009年の東京国際映画祭でヤスミン・アフマド監督の作品に再会した。ヤスミン監督は、CMディレクター出身のマレーシアの女性監督だ。次回作¹も控えていたが、6本の長編映画といくつかの短編・50本以上のCM作品²を遺して、2009年7月に、51歳の若さで急逝した。

私が初めてヤスミン監督の作品を観たのは、2005年の東京国際映画祭のときだった。『細い目』(2004年/原題: Sepet)という、中華系の男の子と金城武の大ファンのマレー系の女の子の恋物語だ。最初は、よくある良家の子と不良少年の恋愛映画かと思った。しかし、愛にあふ



▲ 『タレントタイム』(2009)

れるユーモアと、背筋を伸ばしたくなるような厳しさが同居した、みずみずしい画面に魅了された。2009年に観た、ヤスミン監督の最新作で遺作となった『タレントタイム』（2009年／原題：Talentine）は、私にとって、この映画のために働きたいと強く思えるかけがえのない一本になった。そして、2010年8月のアテネ・フランセでのヤスミン監督の特集上映を通して確信した。彼女の作品には、自分の疑問をブレイクスルーするヒントがあると。

それは、ヤスミン監督の映画が、開かれた映画だからだ。アテネ・フランセは通常、単身で来場する男性ばかりで、はっきり言って雰囲気は暗い。しかし、ヤスミン監督の特集上映期間中は、そういう人たちに混ざって、若い女性のグループやカップルがたくさん来場していたのだ。ヤスミン映画の包容力を感じた。一般的にみれば、アテネ・フランセまで来るのは、相当の映画ファンだろうが、それでも会場の空気ががらりと変わった。



▲ 『ムアラフー改心』（2008）

映画の楽しさは、観ている時間だけでなく、観た後で人と語りあうことにもある。その点、誰かと一緒に観に行くことができる映画には広がりがある。

3. ヤスミン監督のまなざし

その動員の原動力は、ヤスミン監督の映画自体が、閉ざされた世界を越えることに挑戦していたことにある。マレーシアは多民族国家ゆえに、ヤスミン監督の映画では、英語、マレー語、華語、タミル語と、様々な言語が飛び交う。宗教も文化も食べるものも異なる人たちが、同じ画面に登場する。異なるエスニックグループに属する者同士が恋に落ちるだけでなく、時には、家にいるメイドと雇い主の主従関係が逆転したりする。また、小さな女の子が上級生のいじめっこをやっつけたり、いい年をした両親がいつまでも10代のような気軽さと熱烈さで愛し合っていたりして、登場人物のセリフやふるまいが、「こうあるべき」という社



▲ 『ラブン』（2003）

会の価値観を次々とひっくり返していく。そこがまた魅力なのだが、こうした作風は、必ずしもマレーシアでは受け入れられなかった。マレーシアでは、マレー人優遇政策がとられている。したがって、公用語であるマレー語をメインに使った映画でなければ、「マレーシア映画」として認定されない。複数の言語を多用したヤスミン監督の映画は、公的な援助を受けられなかった。

また、イスラム教徒の描き方や、既存の権威を逆転させるようなスタイルが異端視され、マレー人社会から、バッシングも受けた。『細い目』は、検閲で9つのシーンのカットが要求されている³。このような逆境のなか、ヤスミン監督は、

果敢な挑戦を続けて、国際映画祭での評価を勝ち取っていったのだ。

しかし、こうしたマレーシアの社会背景を知らなくとも、ヤスミン監督の映画は存分に楽しめる。映画製作を40代でスタートさせて以来、ほぼ年に一作のペースで、クオリティの高い映画を作り続けたのには驚嘆する。家族や初恋といった、個人的な関係や記憶を細やかに描いていながら、神の視点のように、ぐっとズームアウトして、社会の不条理や人の愚かさを冷静に見つめるまなざしが明確に存在している。

『ラブン』(2003年/原題: Rabun)で視力を失いかけている父親が、悲嘆にくれるでもなく、全てを受け入れてユーモ



▲『ムクシン』(2006)

アたっぷりに生活している様子や、『ムクシン』（2006年／原題：Mukhsin）で、初恋の相手を抱えて自転車のペダルを漕いでいく少年ムクシンの並木道のショット。『グブラ』（2006年／原題：Gubra）で、序盤にワンショットで、パニックにおちいる家族構成を把握させる力量に、『ムアラフ』（2008年／原題：Muallaf）で描かれた厚い信仰に支えられた許し。そして、『タレントタイム』の陽気な音楽と、胸がつまる結末。ひとつひとつを思い出す度に、「ああ、また観たいなあ」と素直に思える映画なのだ。

4. ある一秒に出会える幸せ

ヤスミン監督の作品は、芸術映画だとか、商業映画だとかいう区別がばからしくなるくらい、シンプルで深く面白い。ジャンル分けをして、自分の好みと違うからと、切り捨ててしまうのはもったいない。ヤスミン監督作品のようなタイプの映画が、最先端の芸術映画にはついていけない、でも、大作映画を見に行くたびに失望して、もう映画は信じられないと思いはじめているような観客層を、映画の世界につなぎとめてくれるはずだ。映画を信じて見続けていれば、今まで興味がなかったジャンルでも、ある瞬間あるシーンに心を奪われる出会いというのが

きつとある。ヤスミン監督作品のような一定のまとまった観客動員が期待できる映画を、閉ざされた世界のものにしなくて、一人でも多くの人に伝えていくには、その作品のもつ意味や普遍性を的確にすくいとり、伝わる言葉に変換することが必要だ。それは、外国映画を配給する際、日本人に受け入れられるように、工夫をして邦題をつける作業にも通じるし、大規模でなくとも優れた日本の映画を世界に紹介していく力にもつながる。今後も、開かれた映画の魅力を、きちんと伝えていく方法を考えたい。それが、そうした映画監督の生きる道を支えることになる、と信じている。

*写真提供

：国際交流基金、東京国際映画祭、
コミュニティシネマセンター

<注>

- 1 次回作の『ワスレナグサ』は、シナリオが完成しており、ヤスミン監督のルーツ（祖母が日本人）である、日本で撮影予定だった。
- 2 ヤスミン監督の制作した CM は、YouTube で閲覧できる。その中の一編「恋するタン・ホン・ミン」は、世界の CM を紹介する「マジで！世界（秘）オモシロ CM 全部見せます！」（2010年7月25日テレビ朝日系列放送）にも登場した。
- 3 国際交流基金 バーナード・チョリー「マレーシア映画の現状」
<http://www.jpff.go.jp/j/culture/new/0411/jmg/mv.pdf>

<ヤスミン監督 フィルモグラフィー>

【長編映画】

- 2003年 『ラブン』 Rabun
- 2004年 『細い目』 Sepet
- 2006年 『グブラ』 Gubra
- 2006年 『ムクシン』 Mukhsin
- 2008年 『ムアラフー改心』 Muallaf
- 2009年 『タレントタイム』 Talentime

日本公開年

- 2005年 第18回東京国際映画祭
『細い目』
- 2006年 第19回東京国際映画祭
『グブラ』『ムクシン』『ラブン』
- 2008年 第21回東京国際映画祭
『ムアラフー改心』
- 2009年 アジアフォーカス・福岡映画祭
／第22回東京国際映画祭
『タレントタイム』

(いずれも劇場未公開)

【CMと短編映画】

- ・ペトロナス（石油会社）イメージCM
やシンガポール政府キャンペーンCM
など手掛けたテレビCMは50本以上。
- ・短編“Chocolate”（「15Malaysia」とい
うマレーシアの社会・政治をテーマに
したプロジェクトのために制作。15本
の短編映画作品から成る。
(参照 <http://15malaysia.com/>)

追記：マレーシア映画の新たな流れは、
年長のヤスミン監督が牽引してき
たが、没後もマレーシアでは、独
立系の監督たちによる映画製作が
盛んだ。ウー・ミンジン監督が早
稲田大学の安藤紘平研究室と共同
制作した『タイガー・ファクトリ
ー』（2010年／The Tiger
Factory）は、第23回東京国際映
画祭で上映。タン・チュイムイと
いう女性監督の『夏のない年』
（2010年／Year Without A
Summer）も、第11回東京フィル
メックスで上映。

野澤 喜美子（のざわ きみこ）

慶應義塾大学法学部卒業後、児童図書出
版社、映画配給会社プレノンアッシュ勤
務（アジア映画情報紙「香港電影通信」、
ホウ・シャオシエン監督の特集ムック、
劇場用パンフレットなどの取材・編集）
を経て、映画専門大学院大学在学中。ヤ
スミン・アフマド監督の英語字幕付き
DVDは全タイトル所有。